

昭和57年度 相模・南海トラフ海底活構造調査概報

荻野卓司・富安義昭

海洋調査課

Summary of the Submarine Active Geological Structure Survey
in the Sagami and Nankai Troughs Conducted in 1982

Takuji Ogino and Yoshiaki Tomiyasu
Ocean Surveys Division

1. まえがき

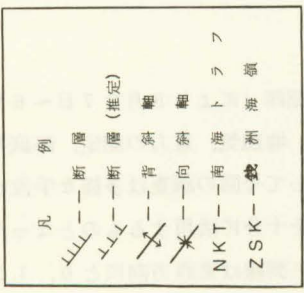
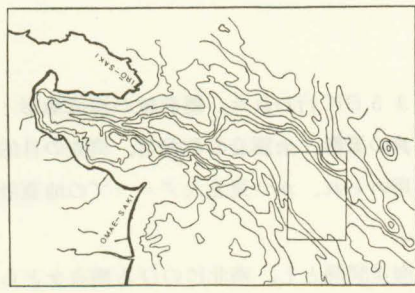
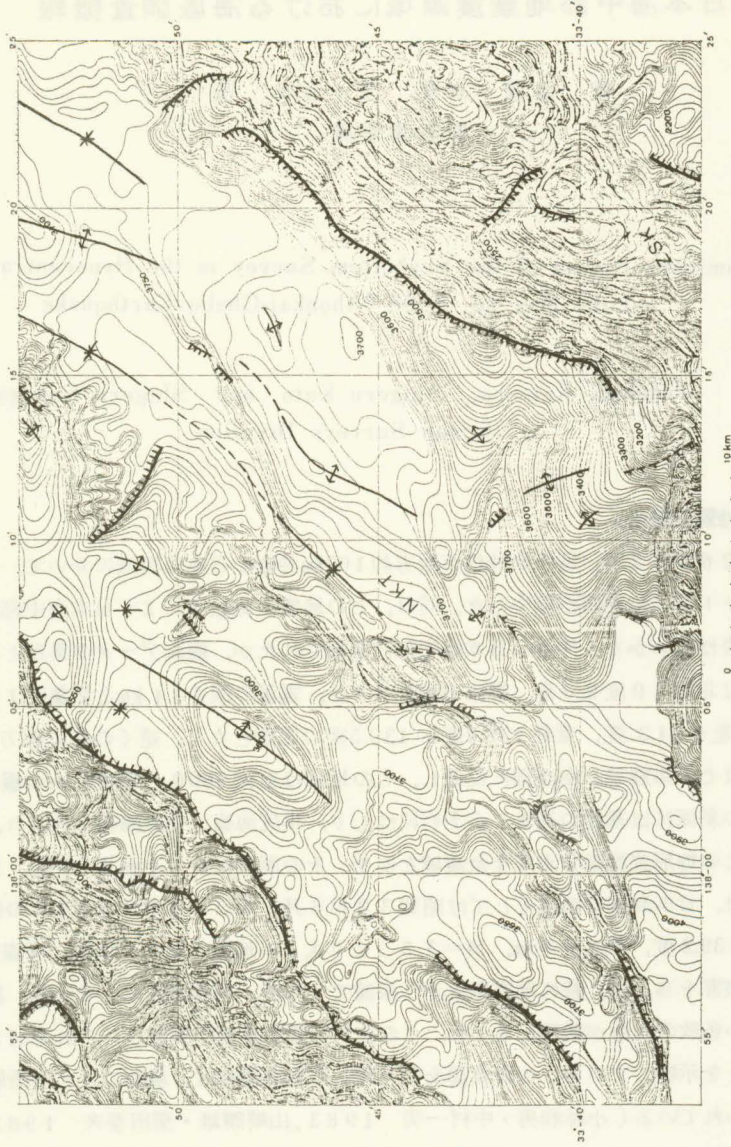
第4次地震予知計画の一環として、昭和55年度から相模、南海トラフの海底活構造調査を実施しているが、57年度の調査結果について概略を報告する。なお昭和55年度及び56年度分についての調査結果の一部は、既に地震予知連絡会会報で発表されている。

2. 調査の方法

測深線方向は東西とし、測深線間隔は750mとした。交差測深線は南北とし測深線間隔は4300mとした。また海底地形、地質構造の重要な区域においては補測を実施した。使用機器は長距離電波測位装置、深海及び浅海音響測深機、表層及び深海音波探査装置、海上磁力計、柱状採泥器等である。

3. 調査結果

当海域の南海トラフ軸の水深は北部で3750m、中央部で3800m、南部で4020mとなっておりNEからSWに向ってゆるやかな傾斜で深くなっている。トラフ底はほとんど平坦であるが、一部中央部から南部にかけて比高約100mのなだらかな浅所が数ヶ所存在し、溝にあたる深みとその間を蛇行し南下している。トラフ底堆積層には、ゆるい褶曲や逆断層が認められた。堆積層表層底質分析により、トラフ底表層の年代は更新世から現世と確認された。陸側斜面及び海側斜面ともにトラフ底に沿って逆断層がある。錢洲海嶺の南側斜面麓には第四紀に海底地すべりがあったと思われる堆積層がかなり広範囲に存在する。(桂, 1983) 層厚は300mから400mであり音響的に不透明な層である。音響的基盤はこの堆積層下700m位にあり南海トラフ底中央部で不鮮明となっている。陸側斜面には典型的な瓦状構造が認められた。



昭和57年度 相模・南海トラフ海底活構造調査結果 (海底地形及び地質構造)